

ブルータス：欺かれたる美德

——高潔という名の名誉に魅せられたるローマ人——

三 戸 祥 子

Brutus: Betrayed Virtue

— A Roman Charmed by the Virtue of Honour —

Sachiko Mito

序

The Tragedy of Julius Caesar は、シェイクスピアの残した幾篇かのローマ史劇の中的一篇である、この劇に与えられた題名を、文字通りにその内容と主人公を端的に表わすものと解するならば、この劇はジュリアス・シーザーの身に起きた悲劇ということになる。しかし、単純にそう判断してよいのであろうか。

確かに、たとえば四大悲劇では、各々の作品に冠せられた人物達の名が文字通り、作品中における彼等の圧倒的存在性を象徴するものとなっていることに疑問の余地はない。しかし、四大悲劇における題名と、その内容や主人公との間にある密接な関連性と全く同様の関連性を、*The Tragedy of Julius Caesar* の場合においても見てよいのかどうかは疑問である。何故なら、この劇においてはシーザー暗殺の首謀者として描かれるブルータスの存在性を無視することができないからである。無論我々は、シーザーの身に訪れる突然の死を思う時、そこに感じられる或る種の悲劇性を否定することはできない。そして又、その肉体が死して後も尚、シーザーの靈魂がブルータス等 conspirators の運命を予言するかのように出沒し、確かに、見えざるものの力としてシーザーの存在性を暗示していることを否定することもできない。

しかしその一方で、我々は“honour”や“honesty”といった言葉で表わされる美德に対するブルータスの信念とその信念に対する自負の比類なき強さを思う時、そしてその信念と自負こそが、結果的にはブルータスをして破滅へと導いていった経緯を思う時、彼の生の悲劇性と存在性は、シーザーのそれを遙かに凌ぐものではなかったかと考えざるを得ないのである。そして、このブルータスの無視し得ない存在性は、この劇の題名の伝える意味に関しても、劇の主題に関しても、文字通りの表面的判断を下すことを我々に躊躇させてしまうのである。

シーザーとブルータス二人のいずれの人物存在に対してより大きな重要性を見るにしろ、各々に訪れる「死と破滅」に現れる悲劇を考える時、観客、読者、批評家達が必ずや直面するのは、二人の人物創造の問題である。たとえ、この劇を登場人物の身に起きた悲劇と言わんよりは、ローマという共和制国家に訪れた悲劇、即ち、Paul Stapfer のように、独裁家による支配、Caesarism への移行によって必然的に起こってくる、共和制崩壊を描いた劇として見る場合においてさえ、シーザーやブルータスの人物像について語らぬまま議論を進めることはできないのである¹⁾。

そしてその人物創造の問題に関しては、十八世紀以降二十世紀現代に至るまで、批評家達はシーザーとブルータス両者の人物像をめぐって、終わることのない対立した見解を提示し続け、議論を繰り返してきた感がある。仮に、Roy Walker, Mark Hunter, T. S. Dorsch 等に代表されるように、シーザーを“a good great ruler”と見る立場を取れば、ブルータスはシーザーの“greatness”を認識し得ず、その殺害に及んでしまう——“terrible crime”を冒した——反逆者、traitor ということになる²⁾。他方、シーザーを“monstrous tyrant”と考える立場を取るなら、ブルータスはその tyrant に対して雄々しく立ち向かい、ローマとローマ市民の自由回復のために戦う a man of “high sense of honour”として高く評価されることになる。こうした立場の筆頭に挙げられるのは J. Dover Wilson であろう³⁾。こうした対立する人物評価は、そのまま、劇中における悲劇がどこに存在するのか、つまり、悲劇がどのような原因によって、誰の身にどのような形で起きるのか、という問題に関する解釈にも反映されていくことになるのである。

上記のように、真っ向対立する見解の混在する状況にあつて、興味深い立場を挙げるとするなら、シーザーとブルータス二人の人物像に対立構造を見るに留まらず、両者に共通する弱点に着目して、彼等の死と破滅はその弱点に起因するものと結論づける立場を挙げることができよう。その弱点とは、或る種の傲慢である。それは、Rene E. Fortin の表現を借りるなら、self-deception という言葉をもって表わすことができるであろうか⁴⁾。具体的には、シーザーの場合であれば、自己の強さに対する過剰な自信から陥る傲慢であり、ブルータスの場合には、自己の信ずる“honour”という美德に対する過信から陥る傲慢である。

この小論の主たる関心は、序の冒頭に既に触れたように、シーザーを hero of “greatness”とする T. S. Dorsch に代表されるような見方を疑い、ブルータスの身に起きる悲劇性に注目して作品を分析することにある。しかし、その意図は“tyrant-Caesar”を打倒する悲劇の英雄ブルータスの中に、完全なる「善」を見ようとする、J. Dover Wilson の立場とも一線を画するものである。

以下、登場人物達の言葉を追うことによって試みる作品分析の主眼点は、ブルータスの信じてやまぬ honour なる美德の本質は何であるのかを問い、彼が、一貫して信念を全うせんとして死と破滅に至った、その原因を見窮めようとすることである。しかしその際、まず問題にしなければならないのは、Caesar’s “greatness”とか、Caesar is “a good great ruler”といった言葉の象徴するシーザー像の信憑性である。なぜなら、多くの批評家がそうであるように、そうしたシーザーの人物像を劇理解の最重要なる拠り所とする時、ブルータスによるシーザー暗殺の動機は“honour”の体現ではなく、単なる権力欲——ブルータスがシーザーの中に見たはずの悪、即ち“ambition”と本質的に大差のない政治的権力欲——以外の何ものでもないという結論が導き出され得るからである。或るいは又、ブルータスがシーザーの中に見た「政治的野心」とは幻に過ぎぬ、即ち、あろう筈のない「野心」をブルータスの浅慮な想像力が、潔白かつ偉大なるシーザーの中に見た幻にすぎぬ、としてブルータスを許し難い罪人とみなしてしまう恐れがあるからである。

しかし、シーザーの言葉とブルータスの言葉を合わせ見る時、上記二つの解釈はいずれも疑わざるを得ない。しかも問題は、たとえば T. S. Dorsch の如く、シーザーの「偉大さ」に (Dorsch の言葉では essential greatness) 劇理解の最重要性を置くならば、シーザーとブルータス二人の人物像や悲劇の所在を見誤らせるだけでなく、他の登場人物の性格や意図をも見誤らせてしまう危うさがあることである。

1. Caesar's "essential greatness"

作品 *The Tragedy of Julius Caesar* の主題に関しても、作者シェイクスピアの人物創造の意図に関しても、解釈の拠り所をほとんど唯一絶対といってよいほどに、「偉大なる支配者」というシーザー観に求める T. S. Dorsch は、“a glorious vapourer and braggart” 或るいは “a ruthless tyrant” といった言葉をシーザーに与えた先人批評家達、William Hazlitt, H. N. Hudson, J. Dyer Wilson 等のシーザー観を徹底して否定する⁵⁾。Dorch によれば、シェイクスピアの真の創作意図とは、シーザーの偉大さを強調し、その偉大なる人物に対する共感と好意を聴衆に促すことにこそあったのであり、その創作意図を先の批評家達は正しく理解しなかったが故に、誤ったシーザー観を持つに至ったと主張する。しかも、シェイクスピアのその意図は早や、劇冒頭の場面に明白であるとも言う。即ち Dorch は、シェイクスピアが、シーザーの「偉大さ」を讃えんとしてローマ市民が日々の仕事を投げ打ち、晴れ着に袖通し、先を競ってシーザーの勝利の凱旋を祝うべく馳せ参じる姿を描くことによって、まさに、シーザーの「偉大さ」を強調しようとしていると考える。更に、シェイクスピアが作品の source とした Plutarch の *The Life of Julius Caesar* においては、ローマ市民のシーザーに対する覆い隠し難い嫌悪感が伝えられているにも関わらず、シェイクスピアはその描写を削除し、シーザー讃美一色に改変しているとも主張している⁶⁾。しかし、事実は果たしてそうか——。我々は、第一幕一場全75行のうち、過半数を占める44行の伝えるものは、二人の護民官、マルラスとフラヴィスによるローマ市民への非難（大ポンペイへの亡恩とシーザー讃美に対する非難）とシーザーの政治的抬頭に対する不満、更には、シーザーを落としめんとする企てであることを見逃してはならない。（二人は、シーザーの銅像から衣類や他の装飾品を剥がして、間接的にシーザーの栄光を陵辱しようとする。）護民官という政務の公職に就く者と、一般ローマ市民を同一視することはできぬものの、シェイクスピアが、ローマ社会は決してシーザー称讃一色に染まるわけではなく、明らかに反シーザー分子が存在し、しかも、行動によってシーザーの権力を否定しようとする勢力として存在することを、この二人の護民官を登場させることで示唆している点に注目すべきであろう。

劇冒頭において、嘗て、ポンペイの勝利凱旋を待ちきれず、幾度となく、或る者は城壁に、或る者は塔に、また或る者は家々の窓によじ上り、一刻たりとも早く、かの英雄の雄姿を見ようと先を競ったはずのローマ市民が、今や、そうした己の姿など忘却の淵に沈め、新たな勝利者シーザーを求めて興じる、その様を描くシェイクスピアの意図は、シーザーの「偉大さ」を強調することではなく、別のところにあると言わねばならない。即ち、民衆というものの移り気、無責任さである。第一幕一場、ポンペイを忘れ、シーザー称讃に走るローマ市民の姿は、後、第三幕二場においてアントニーの言葉に扇動され、暴徒と化してブルータスを叛徒として追う彼等の狂気の姿と重なるものである。第三幕二場、シーザー暗殺の弁明を試みたブルータスの言葉を支持したはずのローマ市民が、続いて登場したアントニーの亡きシーザーに掲ぐ追悼演説によって、一転、英雄シーザーを殺害した“traitor”としてブルータスを血祭りにあげんと狂気に走る姿を目にする時、我々は否応なく、第一幕一場でシーザーに贈る歓呼と共にポンペイへの恩を忘れ、“O you hard hearts, you cruel men of Rome” (I, 1, 56) と、護民官マルラスから叱責を受けるローマ市民の姿を思い起こすはずである。両者に共通するのは、自省を欠いた容易なる心変わりに他ならない。

シェイクスピアの意図は、シーザーの偉大さを強調することにはない。むしろ、偉大さに対する懐疑を促すところにあると言わねばならない。そして何よりもそのことを伝えているのは、

劇中のシーザー自身の言葉なのである。

2. Caesar's arrogance

仮に、指導者、勝者としての人格的偉大さ、国家への貢献度の高さを裏付けとした偉大さが、シーザー像の一端として劇中に紹介されているとして、そうした箇所を指摘するならば、それは、第三幕二場、アントニーによる亡きシーザーに掲ぐ追悼演説の中において伝えられるシーザーの姿であろうか。そこには、国家の繁栄のため、ローマ市民の安寧のため、労苦を労苦と思わず尽くしてきたシーザーの姿が語られ、更に、死後判明してみればその遺志によって、ローマ市民一人一人に然るべき金銭が遺され、共有地が贈られていたことなどを証す言葉が埋め尽くされている⁷⁾。その限りにおいては、シーザーは決して私利私欲に走るものでも、王位に就くことのみ、その野心を燃やし精力を注いだわけでもないことになる。しかし、その他の場面で、果たしてこのようにシーザーが私心なき公人に徹し、ローマ国家のためにその全存在を掲げたことと確信させる描写が見出せるであろうか？ さらに、シーザー自身が語る言葉そのものから“a good great ruler”，或るいは“a picture of courtly and gracious Caesar”といった人物像が伝わり得る場面は果たしてあるのかと問うなら、我々は如何に答えるべきか躊躇せざるを得ない⁸⁾。

シーザー自身の言葉が我々に伝えるものは、むしろ、arrogance という言葉で表現すべき過度の自信であり、自己顕示欲そのものという印象を免れ得ないのである。

2-a. Beware the ides of March

第一幕二場、Lupercal の祭日に、恒例行事として催される裸体の若者による競争の場に姿を見せたシーザーは、何処からか自分の名前を声高に叫ぶ声を耳にする。声の主とその意図を確かめんとしてシーザーは姿なき声に向かって呼びかける。“Speak, Caesar is turn'd to hear.” (I, 2, 17) ここで注目すべきは、シーザーが自分自身を第三人称で言及するという尊大な言い回しを用いている点である。「このシーザーに対して申し述べたき義あらば申してみよ。恐れおおくも、シーザーが自ら許可を与え、その思い聞いてやってもよいぞ。」と、あたかも王位にある者の如き態度である。更に見逃してならないのは、シーザーが「聞こう」と言いつつもその実、間を置かずして聞く耳持たぬ態度に変化することである。いざ、その声の主が姿を現し、警告と覚しき言葉、“Beware the ides of March” (I, 2, 18) を発するや、シーザーは、虚言を弄する愚者として声の主、Soothsayer を退ける⁹⁾。彼は、何故 the ides of March にシーザーの身辺に異変が起きるかのような予言めいた言葉を口にするのか、その理由を問い直すことなく、Soothsayer を捨て置き、“He is a dreamer; let us leave him.” (I, 2, 24) と言い残して立ち去ってしまうのである。さて、シーザーは何故この時、Soothsayer の言葉を無視して去ってしまったのであろうか。その疑問の答えを探る前に、引用文中の人称代名詞“us”に注目しておく必要がある。仮に、この“us”が王位もしくは王位に準ずる者が、己の権威を誇示しようとして用いる、いわゆる“royal we”と呼称される類の人称代名詞であるとするなら、先に、第三人称をもって自己に言及した時と同様、シーザーの尊大さを反映した表現と解することができよう。何故なら、現実にはシーザーは、未だローマの王とはなり得ていないのであるから。

但し、“let us leave him”とシーザーが言った時の状況は、この“us”がシーザーだけでなく、従者を始め、その場に居合わせた人物すべてを指して言及しているとするなら、文字通り、一人称複数形の we の目的格と解する可能性も十分に残されている。その場合には、“us”は必ずしも、シーザーの尊大さを反映する表現と断定することはできなくなる。

さて、再度、シーザーが *ides of March* に関する警告を無視したその理由に立ち返ることにしよう。己を「無敵」と信ずるシーザーは *Soothsayer* を狂人（原文では *dreamer*）扱いすることで、不遜にも、敵知らずということではローマ随一の男ジュリアス・シーザーに対して、あり得ようはずのない危険を口にした予言者に一矢報いるつもりであろうか。あるいは、居並ぶローマの武将や従者達を前に“*cowadice*”を踏わにすまいと敢えて平然を装い、*Soothsayer* の警告を（結果的には恐るべき真実の予言）一顧だにする価値のない虚言として退けることで、自らの強さを誇示するつもりであろうか。いずれにしろ、人称代名詞という形ある姿を取ってシーザー自身の口から漏れ出た、「言葉としての尊大さ」はそのまま、「内面の尊大さ」を、そして自己の強大さを誇示したいという願望を映し出していると解することができる。

そして、反復を恐れず再度我々の注意を促すなら、この場面にはシーザーの妻カルファニアを始めとして、劇中主要な位置を占める人物達が居合わせていることを忘れてはならない。即ち、アントニー、ブルータス、キャシウス、そして、シーザー暗殺に加わる他の面々の幾人かが、更には、劇冒頭において反シーザーを公言するマルラスやフラヴィスも居合わせていることを思い起こさなくてはならないのである。彼等はすべて、眼前に権威と強さの誇示に余念のないシーザーを目撃するのであり、そのことはおそらく、この後、暗殺に手を染めることになる男達の内面に、シーザーの野心に対する疑いを芽生えさせ、増大する権力への反感や嫉妬を増大させていく契機となったであろうことは容易に想像することができる。目撃者としての聴衆を多く持つことは、シーザーにとっては、強さを誇示する必要性と絶好の機会を提供するだけでなく、同時に危険な要素をも同時にはらんでいたのである。

そして、強大さの誇示がはらむ危険性という点で非常に興味深いのは、第一幕二場と本質的には同様の状況が、第三幕一場の冒頭に（第1行から75行まで）描かれていることである。

2-b. Artemidorus' warning

第二幕二場においてシーザーは、夫の殺害される悪夢にうなされた妻、カルファニアの懇願に折れて一度は登院を断念したものの、デシウスの巧みな言葉に誘われ、元老院へと向かうことになる。そして第三幕一場の冒頭、元老院に入ろうとするシーザーの行く手を遮り、重大事を告げる手紙を手渡そうとアルテミドラスが進み出る。実は、アルテミドラスは機会あってシーザー暗殺の企みを知るに至り、手紙には陰謀者達の名前が網羅されているのであった¹⁰⁾。従って、その手紙は危険を告げる情報としては第一級のものである。アルテミドラスは、今、自分が差し出そうとする手紙はシーザーの身に関わること故、直ちに読んで欲しいと迫るが、シーザーは拒んでこう答える。“*What touches us ourself shall be last serv'd.*” (III, 1, 8) 全ローマの運命を担い、その支配者たる地位にあるシーザーに関わることなど、後回しだというわけである。拒まれてなお迫るアルテミドラスを指して、“*What, is the fellow mad?*” (III, 1, 10) と言い残し、シーザーは元老院の中へと入っていくのである。これら二つの引用文のうち、後者、即ち、執拗に手紙に目を通すように迫るアルテミドラスを狂人扱いするシーザーの言葉は、第一幕二場において危険を予知して“*Beware the ides of March.*”と警告を与えた *Soothsayer* を“*a dreamer*”と呼び一笑に伏した、あの時のシーザーの言葉を我々に思い起こさせるであろう。“*mad*”と“*dreamer*”とでは、表現の違いこそあれ、いずれも、「常軌を逸した」者の発する言葉など顧みる価値なし、として警告者を退ける態度を反映している点で共通している。次に、最初の引用文で我々の注目を引くのもやはり、第一幕二場の冒頭との共通性である。あの時と同様、シーザーはここ第三幕一場でも“*us ourself*”と、王位にある者が用いる第一人称複数形による自己言及の表現（いわゆる *royal we*）を取っている¹¹⁾。双方いずれの場合にも、根底に

流れているのはやはり、自己の権威を誇示せんとして露呈した尊大さである。更に、引用文全体の内容に目を転ずれば、内実は自己顕示欲でありながら、表面的には、公人としてのあるべき姿、国家と市民に対する責任感を表明した言葉になっている点に誰しも気づくはずである。「(国家の行く末を預かる) 自分には己の個人的な問題にかかずらわっている暇も意図もない。首長たる者、国家やローマ市民の問題をこそ優先させるべき責任を担うものなり。」と言わんばかりの言葉は、“royal we”なる特殊な自己言及の表現と相まって、シーザーが早や、「王位」と自己とを同一視していることが窺えるのである。未だ、王位にはない者が、敢えてこのような表現を用いる時、聴く者の耳には語り手の尊大さのみが強く響いてくるはずである。

さて、この権威を誇示せんとして露呈するシーザーの尊大さは、いよいよ元老院に足を踏み入れたその時、一層強調されていくのである。

2-c. Wilt thou lift up Olympus?

元老院議員とローマ市民を前に開口一番、“Are we ready? What is amiss/ That Caesar and his Senate redress?” (III, 1, 31-32) と、語りかけるシーザー。今や彼は「絶対者・王」であった。元老院はシーザーの私的諮問機関に過ぎず、すべての裁定は最終的に、王たるシーザーの意向に従って下されねばならなかった——少なくとも、シーザーの意識的願望ではそうであった。従って、“his Senate”という表現は不可欠であり、他の言葉に変えようのない重要性を持っていたのである。そして、一度下された裁定は、絶対者以外の者の意向や願望によって覆されることは決してならない。だからこそ、追放の身として異国の地にある直兄 (Publius Cimber) の赦免を願うメティーラス・シンバーは“base spaniel” (III, 1, 43) として侮辱され、愚か者として退けられるのである。力無き者が、膝を折り、身を低うしてシーザーを“Most high, most mighty and most puissant Caesar” (III, 1, 33) と絶対者に贈る讃辞をもって崇めようとも、それは彼の感情を動かすことはなく、むしろ怒りを助長するのみである。弱き者を前にしても、シーザーには隣憫の情も、慈悲の心も無縁である。この時、シーザーは王冠が自分の頭上に掲げられるのは、時間の問題だと確信していた——登院直前のシーザーにデシウスの伝えた情報が正しければ、元老院はほどなく、シーザーに crown-offering を申し出るはずであった。従って、支配者としての絶対的権威をこの場で強く印象づけておくことは、彼にとって必要かつ得策と思われたに違いないのである。

「犬畜生」(base spaniel) と蔑まれ、懇願を退けられて、救いの手を失ったメティーラスに代わって、キャシウスが身を沈めて嘆願し始めるや、シーザーは、自分は天空に不動の位置を保つ“the northern star” (III, 1, 60) と同様、地上にて不動の位置を誇る唯一の人物であり、既に下した裁定は何があろうとも変える意志は毛頭ないと言明する。その場に居合わせたツイナは、そのあまりの頑なさに思わず、絶望と、そして憤りの嘆息をもらす——“O Caesar!” ツイナの非難のこもった叫びに挑発されたか、シーザーは、既に自己の中で増長し、もはや行き場を失っていた激しい顕示欲を爆発させるのである。“Hence! Wilt thou lift up Olympus?” (III, 1, 74) 「人知の及ばぬ神を動かそうというのか?」“Olympus”とは、古代ギリシャの神々が住まるとされる神聖の山である。単なる山を動かすことでさえ容易ならざる不可能事である。ましてや、神々の住う神聖の山、オリンポスの山に手を触れるなど、不可能事であるばかりか、それは神への冒瀆である。「人間に許されぬことを為さんとする者がいようとは! その罪深さを知り、己の分をわきまえて(神の前から)立ち去るがよい!」“Wilt thou lift up Olympus?”という言葉は、シーザーの尊大さが頂点に達したことを示す象徴的な言葉である。そしてこの言葉を発した瞬間、彼はその自己の尊大さに欺かれたが如く、暗殺者達の刃に倒れ、死の淵に

沈むのである。

しかし、ここで一つの疑問が我々を捉える。天空に光を放つ無数の星々の頂点に座す “the northern star” に自己を喩え、古代ギリシャの神々の住む “Olympus” に自己を喩えるシーザーの、この自信、自己の強大さや絶対性に対するこの自信は、一体、何を拠り所に生まれ出ずるものなのであろうか。

2-d. Caesar is more dangerous

第二幕二場、妻カルファニーヤの見た夢は悲惨であった。夢の中のシーザーは、笑みを浮かべる数人のローマの男達によって刺し殺され、市中に立つ彼の銅像は、まるでその同じ傷が刻み込まれたかのように、無数の吹き上げ口を持つ噴水の如く、体の至るところから血潮を吹き上げていた。しかし、妻の告げる血塗られた夢も、彼女の懇願も、シーザーの外出を拒むことはできなかった。シーザーには「死」への恐れなどなかったのである。

Caesar. Cowards die many times before their deaths:
The valiant never taste of death but once.
Of all the wonders that I yet have heard,
It seems to me most strange that men should fear,
Seeing that death, a necessary end,
Will come when it will come.

(II, 2, 32-37)

[死] とは、人間が生まれながらにして mortal である限り、避け難い天命の如き運めである。従って、「死」を恐怖することは cowards の仕業であって、真の勇者には無縁のことである。仮に、この「死」に対する恐れを知らぬ言葉が、cowards と valiant との対比によって語られていなければ、「死」という人間の運命に対する悟りにも似た言葉として、我々第三者の耳に響いていたかもしれない。何故なら、この直前にシーザーは、見えざる大いなる力、mighty gods への畏怖を示す言葉 “What can be avoided, / Whose end is purpos'd by the mighty gods?” (II, 2, 26-27) を口にしてからである。この言葉は、上記引用文の最後の二行、“death, a necessary end / Will come when it will come.” と内容的には一致している。そして、そこにのみ注目するなら、両者はいずれもシーザーの「生と死」に対する達観を表わしていて、誓むべき態度の証しとなったに違いないのである。

しかし実際には、シーザーは「死」を恐れることを cowardice として嘲笑し、その cowardice とは無縁の自己——valiant——の強さを誇示しているに過ぎない。それは、同じく第二幕二場、あらゆる危険をもひるませるほどの「無敵」を誇る彼の言葉を見れば、尚一層明らかである。

Caesar. Danger knows full well
That Caesar is more dangerous than he:
We are two lions litter'd in one day,
And I the elder and more terrible;

(II, 2, 44-47)

人に恐怖心を (fear, II, 2, 43) 与える危険 “danger” とはシーザー自身に他ならなかった。生まれ出でたその日より、他を恐怖させる資質を備えて生を受けたシーザー、現実の危険を次々と凌駕してきたシーザーにとって、恐るべき敵など皆無である。危険そのものが自ら退散してし

まうほどにシーザーは今や強大なのである。だが、当のシーザーが自信を誇示すればするほど、それだけ逆説的に、誰しも人間として免れ得ない、普遍的な弱さや限界というものを無視して自己の強さを誇るその姿が、第三者の目には愚かとも、滑稽とも映ることを否定することはできない。また、この時シーザーが、妻の夢を不吉の予兆として恐怖する素振りを見せるなら、即座に *cowardice* の誹りを受けるであろうと案ずるあまり、不自然なまでに強さを誇示していると解することも可能であり、そうであるなら一層滑稽さは増すのである。いずれにせよ、人間に与えられた「死」を始めとする「限界」を無視して己の絶対性を信じ、それを誇る姿は Rene E. Fortin が “self-deception” と評した、自己に対する無知——自己過信という無知——を露呈する姿以外の何ものでもあるまい¹²⁾。そしてここにも姿を変えた、しかし同質の *arrogance* を指摘しないわけにはいかない。第三者の目には *arrogance* としか映りようのない、シーザーの自己の強大さと権威に対する過剰な自信と、そしてその自信の誇示は、彼の王位、王冠に対する飽くなき野心を反映したものである。言葉を変えるなら、シーザーの過剰な自己顕示欲は、王たらんと欲する野心と表裏の関係にあるとすることができる。自己の手にする力と権威が増大するが故に自信を深め、やがて王位への野心が芽生え、そして増幅するのであり、また逆に、野心が留まるところを知らず増幅するが故に、過剰な自己顕示欲にかられ、他者の前で（とりわけ弱者の前で）尊大な言葉や態度を見せることになるのである。

このように考えてみると、シーザーの野心と尊大さは、Ernest Shanzer を始めとする一部の批評家達の指摘するようなブルータスによる単なる推測の産物などではなく、シーザー自身の言動を証しに持つ確かな事実であると言わねばならない¹³⁾。

3. Caesar's covetous desire to be called king

第一幕二場、第100行から131行は、キャシウスがブルータスを相手に長々と語る、シーザーへの中傷めいた言葉である。その言葉の信憑性がどれほどのものであるかは別にして、そこに描かれているのはローマに君臨する英雄とは程遠い、*cowardice* あるいは *weakness* 以外の何ものでもない、シーザーのもう一つの実体である。だが、その一方で興味深いのは、かつてそうした「弱さ」と「臆病」を自己暴露したシーザーが権力者の座に就くことに対して、キャシウスが強い不信の念と嫌悪感を表明している点である。

Cassius. Ye gods! it doth amaze me
 A man of such a feeble temper should
 So get the start of the majestic world,
 And bear the palm alone.

(I, 2, 131)

タイバー河の奔流に挑んであえなくその大波にのまれ、命からがら岸に上がったシーザー。スペイン戦線では熱病に冒され、衰弱した体をわなわなと震わせ、小娘の如き涙声を出して水を求めたシーザー。ローマの自由市民としてシーザーと対等であると信じるキャシウスにとって、このような弱きシーザーを絶対者と仰いで従属することなど耐え難い屈辱であった。人は、対等に競えば決してひけを取らぬと自負する相手に対しては、仮に、その相手が予想外の成功を納めたり、権力を手にしたりすると、往々にして嫉妬や嫌悪の感情を抱くものである。この時のキャシウスを捉えていたのは、そうした感情であるかもしれない。無論のこと、正当なる根拠を持たぬ嫉妬や苦しみも存在しはする。しかし既に、シーザーの言動を幾つかの角度から吟

味してきた我々にとって、彼の野心と権力の誇示が動かし難い現実味を帯びてきた今、キャシウスの言葉を妄想として退けるわけにはいかない。彼に、“I had as lief not be as live to be/ In awe of such a thing as I myself./ I was born free as Caesar;” (I, 2, 94-97) と語らせ、生得の権利である「自由」を脅かすシーザーを拒絶させるものが、やはりその権力誇示への反感であり、更なる権力、即ち、王位を希求する野心に対する嫌悪であることはもはや否定できない。そして、キャシウスの言葉は、ローマ市民の、とりわけ「自由」の価値を強く意識する層の人々の代弁と考えることも可能であろう。

確かに、T. S. Dorsch の指摘するように、作者シェイクスピアは Plutarch とは異なり、“covetous desire” といった直接的表現を用いてシーザーの野心を描くことはしなかったかもしれない。ローマ市民の嫌悪に直接言及することもなかったかもしれない¹⁴⁾。しかし、そうであるからといって、シーザーの野心が描かれず、讚美のみが描かれていると解するのはあまりに単純な解釈である。そして注目すべきは、Plutarch が不特定多数の声としてシーザーの野心に対する嫌悪を伝えたのに比して、シェイクスピアはキャシウスという個の声を通して描き、より現実味を増した嫌悪を表現している点である。特定の個の声を通して語られる言葉の方がより印象深く、劇的効果を高めることは言うまでもあるまい。そして、同様の描き方は、同じく第一幕二場、Lupercal 祭日の競争の場において観察したシーザーの様子を伝える、キャスカの言葉にも見ることができるのである。

Casca. I can as well be hang'd as tell the manner of it: it was mere foolery; I did not mark it. I saw Mark Antony offer him a crown — yet 'twas not a crown neither, 'twas one of these coronets — and, as I told you, he put it by once; but for all that, to my thinking, he would fain have had it. Then he offered it to him again; then he put it by again; but to my thinking, he was very loath to lay his fingers off it. And then he offered it the third time; he put it the third time by; and still as he refus'd it, the rabblement hooted, and clapp'd their chopt hands, and threw up their sweaty night-caps, and uttered such a deal of stinking breath because Caesar refus'd the crown, that it had almost choked Caesar; for he swooned and fell down at it. And for mine own part I durst not laugh, for fear of opening my lips and receiving the bad air.

(I, 2, 234-248)

14行にも及ぶ長い描写を取って引用したのは、キャスカのこの場面描写が、単に、三度差し出された勝者の王冠 (Lupercal 競争の勝者) を三度、いずれもシーザーが拒んだという外面的事実を伝えていることを確かめるためではなく、そこにある、別の意図を知るためである。作者シェイクスピアはまず、語り手キャスカに crown-offering は全くの茶版劇であったと言わせることによって、以下に続く描写の tone を定めている。キャスカは終始一貫、シーザーを椰揄し、その場の雰囲気全体を椰揄し、シーザーの謙譲を誉める民衆を椰揄し、あたかも、一枚の戯画を描くが如き印象を与えている。本物ならざる crown を差し出され、それでも欲しくてたまらぬシーザーはかろうじて、内にうごめく「王冠」への渴望を封じ込め、coronet を押し戻す。だが、そば近くで目撃するキャスカの目には明らかに、シーザーがアントニーの差し出す coronet をいかにも不承不承に押し戻す様子が手に取るように読み取れているのである。この儀式が三度も繰り返されることに加えて、キャスカの主観的印象を表わす言葉——“He would fain have had it” 或るいは、“he was very loath to lay his fingers off it” (it はいずれも

この時、ブルータスの表情には憂いが湛えられていた。彼の胸の内には、シーザーの野心に対する疑いが膨らみつつあるものの、一方では、シーザーへの私淑と敬愛の情も浅からぬものを抱いていたからである。ブルータスは、憂いの理由を明らかにせぬまま、思惑ありげなキャシウスを相手に、己に求められることがローマに利することであるなら、迷うことなく、ローマのために殉ずる覚悟でいると語る。

引用文中の“the general good” (1.85)とは先にも触れたように、個人的利益ではなく、公的利益、即ち、国家、市民の利するところといった意味を表わしており、次行の“honour”は、個人の名を挙げようとする世俗的名誉 (worldy honour) ではなく、精神的名誉 (spiritual honour) を指した言葉である。即ち、“the general good”のために尽力することが、ブルータスにとっての真の honour (の実践)なのである。同様に、“indifferently”という語も私情に左右されぬ態度を示す語として用いられている。従って、この時ブルータスは、真の名誉——個人的利益や野心を動機としない行為によって証しを与えられる名誉——のためであるなら、いつ何時であれ、己の命をも賭す覚悟であることを明言しているのである。天上の神々も、そのような生き方をするブルータスをこそ讃え誉むなりと信ずるブルータスであった。

そして、この honour という美德に対する無類の傾倒こそがキャシウスの誘惑的となり、易々とブルータスをシーザー暗殺へと引き入れてしまう要因ともなるのである。キャシウスは、彼自身の言葉にも (I, 2, 305-312) 明白であるように、堅固な信念も、信念に対する自負も甘言の前には無力となり、本来の自己を忘れ、捨て去ることさえあり得ると考えている¹⁸⁾。ところが、ブルータスは、彼が義弟であり、親友であるが故に、そして何よりも、同一の価値——大義に殉じて全うする honour——を共有すると信ずるが故に、キャシウスの意図など疑うことなどないのである。

キャシウスは、ブルータスが己の高潔さに対して抱く自負心に直接的に働きかけるだけでなく、匿名の投げ文という形の甘言も用いた。筆跡を変え、数通用意された投げ文には、いずれも、あたかもローマ市民のすべてが、ブルータスの決意を迫り、ブルータスによる世直しを望んでいるかのような言葉がしたためられてあった。

Brutus. 'Brutus, thou sleep' st. Awake, and see thyself.
Shall Rome, &c. Speak, strike, redress!
Brutus, thou sleep'st; awake.'
Such instigations have been often dropp'd
Where I have took them up.
'Shall Rome, &c.' Thus must I piece it out:
Shall Rome stand under one man's awe? What, Rome?
My ancestors did from the streets of Rome
The Tarquin drive, when he was call'd a king
'Speak, strike, redress!'

(II, 1, 46-55)

引用文中、まずわれわれの注意を引くのは、第一行にある「目覚めよ、ブルータス、(閉じた) 瞼を開け、己の姿をよく見るのだ。」という言葉であろう。ブルータスは、その呼びかけに答えるかのように、深い眠りから揺り動かされ、目覚めさせられたが如き強い衝撃を受けるのである。“Awake, and see thyself”という言葉は、第一幕二場、キャシウスが「ブルータス

は己の姿を (“your hidden worthiness” I, 2, 57) 映す鏡を持たぬ。」と嘆いた、あの言葉をブルータスに思い起こさせるはずである。キャシウスの狙い通り、ブルータスは “the general good” のために献身するという信念の正しさを改めて確信し、その信念の体现者は自分において他にはないと、自負心を高めるのである。引用文第53-54行にあるような、かつて、ローマから自由を奪った暴君タークィンへの言及も明らかに、同じく第一幕二場においてキャシウスの触れた故事が、ブルータスの脳裏に蘇っていることを示している。ブルータスは今や、祖であるルシウス・ユニウス・ブルータスを範とし、ローマの自由の守護者たらんと誓うのである¹⁹⁾。

注目すべきはシェイクスピアが、ブルータスを行動に駆り立てているのは、公的利益のために尽くすことを名誉の実践と考える、その名誉観であることを強調する一方で、その信念こそが他者に利用される弱点ともなり得ることを示唆している点である。第一幕二場のキャシウスの言葉が、上記に引用した第二幕一場においてブルータスの脳裏に蘇る形で反復されていることが、そのことを物語っている。ブルータス自身は己の内なる名誉への希求に突き動かされて、ローマの世直し (redress) を決断したと信じているが、実は、既に見てきたようにキャシウスの誘惑に導かれてもいるのである。

4-b. No oath for honour

ブルータスの honour への希求は、完全なる「高潔さ」の追及として表わされる。しかし、高潔さは純粹さの証しであると同時に、単純さ、浅慮に陥る弱点をも潜めている。ブルータスが、自宅に投げ込まれた手紙を読み終えたところへ、キャシウスと共に数人の男達が訪れる。彼等は、大義を果たさんとする者の慣わしとして誓いを立てようとするが、ブルータスは断固としてそれを拒絶する。

Brutus. What need we any spur but our own cause
To prick us to redress? What other bond
Than secret Romans that have spoke the word
And will not palter? And what other oath
Than honesty to honesty engag'd
That this shall be or we will fall for it?

(II, 1, 123-128)

「信義 (honesty) を重んずるローマ人は、「世を正す」と一言、その言葉を口にすれば決してその決意を違えることなどありはしない²⁰⁾。ここにこうして集うた我等はそのような真のローマ人であるはず。そうであるなら、「信義」と「信義」とが交わした約束——世を正すべし、さもなくば死あるのみ——と誓ったその約束以外に、求めるべき誓い (oath) があろうや？」ブルータスによれば、彼等にとっての実質的な誓いは、各々の心の内の決意と、互いの決意を支える「信義」そのものであり、それはもはや満たされており、今更「言葉」による誓いなど不要であった。いやむしろ、「誓いを立てる」など愚かしい試みは、高潔なる大義も、高潔なる決意もすべて汚してしまうことになろうと語気を強めるブルータスである。

Brutus. but do not stain
The even virtue of our enterprise,
Nor th'insuppressive mettle of our spirits,

To think that or our cause or our performance
Did need an oath;

(II, 1, 132-136)

“honour” や “honesty” という言葉によって表わされる美徳の価値に寄せるブルータスの信頼は、移ろいやすい人間の意志や感情、即ち、人間の普遍的な弱点とは相入れぬものである。高潔を自負するブルータスにとって、信念も、大義を果たす決意も揺らぐべきはずのない絶対的価値であり、それを不安に思ったり、懐疑すること自体が信念を汚すことであり、純粋であるべき信念や大義を邪心によって歪める行為であった。「誓い」を提案したキャシウスを始め、他の男達がどれほどブルータスの考えを共有していたかは不明であるが、自信に溢れたブルータスの前に彼等は沈黙を余儀なくされるのである。しかしこうして、“honour” や “honesty” に不動の価値をみるブルータスの直線的思考は、後に、彼自身を欺くことになるのである。

4-c. To be sacrificers, not butchers

真の honour を全うせんとする者には oath は不要と断言したブルータスは、大義の実践そのものに対しても厳格な純粋さを求めていく。シーザー亡き後、その寵愛を受けたアントニーの処遇をめぐる、またしてもキャシウスと対立する時、ブルータスは、大義のための流血が許されるのは、シーザーの肉体に対してのみであると言う。

Brutus. For Antony is but a limb of Caesar,
Let's be sacrificers, but not butchers, Caius.
We all stand up against the spirit of Caesar,
And in the spirits of men there is no blood.
O that we then could come by Caesar's spirit,
And not dismember Caesar! But alas,
Caesar must bleed for it!

(II, 1, 165-171)

引用文第三行、“the spirit of Caesar” は単に、「肉体」に対する「靈魂」を意味するのではない。それは、シーザーの王位、王冠への野心を指す。彼等が自由喪失の危機に瀕したローマを救わんがために葬り去らんとするのは、シーザーの野心 (spirit) であって、肉体の命ではない。だが哀しい哉、肉体を傷つけることなくシーザーの野心を奪い取ることはできない。望まずして奪うシーザーの血や肉体の命は大義のために捧げられる sacrifice——いわば、神に捧ぐ「いけにえ」なのである。Anna Paolucci は、ブルータスを女神 Ate の使者とみなしているが、果たしてそこまでの自己神聖化がブルータスの中にあっただか否かは別として、彼が、シーザー暗殺を神聖なる行為と考えていたことは否定できまい²¹⁾。従って、「シーザーの野心打倒という大義」とは直接関係の無い、「アントニー殺害という行為」は神聖なる大義への冒瀆であり、希求すべき真の名誉への冒瀆であった。そのような行為は、彼等をして血に飢えた殺戮者、butchers へと墮としめる悪であった。

しかし、シーザー暗殺の浄化こそは、まさしくキャシウスを始めとする他の男達の願いであったはずである。“sacrificers” になろうとも、“butchers” にはなるべからずというブルータスの言葉を耳にする時、我々は、第一幕三場の終わり、キャスカがブルータスの秘める不可思議の力に触れた言葉を思い起こさずにはおれない。

Casca. O, he [Brutus] sits high in all the people's hearts;
And that which would appear offence in us
His countenance, like richest alchemy,
Will change to virtue and worthiness.

(I, 3, 157-160. []は筆者)

「罪深い悪」と思える行為も、高潔なるブルータスの支持を得る時、それはまるで錬金術にでもかかったかのように、「美德」へ、「誉むべき善」へと変様するのである。」第二幕一場で、“sacrificers”たるべしと説き、アントニー殺害を無用の流血として退けるブルータスとその時、第一幕三場のこのキャスカの語った称讃を知るよしもないのであるが、彼はあたかもキャスカの言葉に証しを与えるかのように、暗殺という血塗られた行為を“sacrificers”という語によって浄化、神聖化するのである。

しかしながら、政治的判断として見るならば、アントニーの放免は愚かな選択と言わねばなるまい。だが、アントニーをシーザーの四肢の一本、“a limb of Caesar” (II, 1, 165) に過ぎぬ存在としか見ないブルータスの目には、彼の中に潜む復讐の意図やシーザーに通ずる政治的野心は映ってはいない。ブルータスの関心事は唯一、汚れなき honour の全うである。アントニー助命は彼にとって、高潔なる美德 honour の純粋性を高める決断であり、決して、キャシウスの案ずるような危険など招くはずはなかったのである。しかし、ブルータスの求める honour が如何に高潔で純粋であろうとも、彼を取り巻く状況が必ずや、その希求に報いるとは限らない。何故なら失うべき命を得たアントニーは、ブルータスの高潔への希求をむしろ利用するからである。“oath”を拒み、“butchers”への墮落を拒むブルータスを支えているのは迷いの無い、真の honour に対する信念と自負であるが、その信念と自負は、同時に、盲目的過信となる恐れがあった。

4-d. Antony speaks by leave and permission

第三幕一場、シーザーを首尾よく殺害し、世直しの大目的を果たした直後のブルータスは、おそらく、正義を成したという高揚感に全身を満たされていたであろう。それは、シーザーの中にある邪悪なるもの——野心を放逐し、ローマ全土を陥れた「自由」喪失の危機を未然に防いだという満足感であった。しかもブルータスは、己の自負する「高潔さ」を買われて世直しという大義の先導者に選ばれ、今まさに、その大役を果たし終えたのである。身の内に感じる高揚感はいかばかりのものであったろうか。そして、この高揚感と満足感に浸る只中、ブルータスはアントニーに差し向けた使者を迎え、続いてアントニーを迎えるのである。ブルータスは、更なる「高潔」の証しをアントニーに対して、いや、何よりも己自身に対して示さずにはおれぬ状況にあった。

アントニーは、まず使者を差し向けてブルータスの真意を探るが、(当然ながら、アントニーは第二幕二場において、暗殺者等が彼の処遇をめぐる議論したその内容は知らない。) 使者に託した伝言の内容は端的に言うなら、ブルータス個人に対する flattery と submission がその主調を成している。“Brutus is noble, wise, valiant and honest” (III, 1, 127) ブルータスを讃えるために用いられたこれらの形容詞のすべては、彼自身が自負してやまぬ美德そのものであり、これ以上に彼の誇りと優越心をそそる語はあるまい。そして、ブルータスはシーザーではなかった。第三幕一場、直兄の赦免を懇願して大地に伏すメテューラス・シンバーを“base spaniel”

と侮辱し、退けたシーザーと同じ態度はブルータスには取ることはできなかった。今や、屍となりしシーザーを選ばんよりは、大義に生きるブルータスと運命を共にしたしと言明するアントニーを拒むことは“honest and noble”なるブルータスにはできない。彼はアントニーの命を保証し、シーザー暗殺の正当なる理由を与えることも約して使者を帰すことになるのである。まさに、ブルータスはアントニーの称讃に相応しい「高潔なる」ローマ人として振る舞ったのである。それは、アントニーの狙い通りであっただけではなく、なによりも、ブルータス自身の自負心を満足させるアントニー受容であったはずである。

さて、「寛大なる」ブルータスから命の保証を得て、彼等の前にその姿を見せたアントニーは、単に恭順の意を示す“a limb of Caesar” (II, 1, 165) ではなかった。それは、遥かにしたたかな政略家の顔を併せ持つアントニーであった。ブルータスの前に立ちはだかるアントニーは、後に、同じくローマ史劇的一篇として書かれることになる「アントニーとクレオパトラ」に登場するアントニー——ローマの武将として精神的名誉 (spiritual honour) に殉じ、クレオパトラへの愛に殉じたアントニー——とは別人であった。「アントニーとクレオパトラ」に描かれるアントニーは、精神的名誉という価値を共有する点において、むしろ、ブルータスに通ずる性格を与えられているとさえ言うことができる。だが、今ここに、ブルータスに敵対すべく登場したアントニーは、それとは似て非なる全くの別人であった。彼は、ブルータス等一行への恭順を示しつつ、他方では、言葉の端々に巧みに彼等を非難する意図をこめて語った。シーザー暗殺が「血塗られた」行為であり、シーザーを欺き、そしてローマを欺く「大罪」であるかの如き印象を与えるべく、言葉を選んで語った。或るいは又、性急な和解と恭順がブルータス等に疑いを抱かせると恐れてか、アントニーは“coward”や“flatterer”といった語によって自らを非難してみせる。ところがその一方で、シーザーの死を正義と称しつつ、他方では、シーザーの死を激しく嘆き、アントニー自身の裏切り (シーザーの死に復讐をもって報いることなく、暗殺に手を下した“enemies” (III, 1, 204) と手を組んでいること) を告発してみせるという具合である。だが、注意深く吟味すれば疑いを促すであろうはずのアントニーの言葉も、ブルータスの耳はそこに怪しむべき響きを聞き取ることはなかった。怪しまぬばかりか、予め使者を通して与えておいた約束を再度確約することに加えて、更に新たな「寛大」の約束をアントニーに与えることになるのである。アントニーは、market-place にシーザーの遺体を運び入れ、そこで、亡きシーザーに追悼演説を掲げることを許されるのである。

第三幕二場の見どころは、ブルータスとアントニー二人の演説の形式、内容両面における対照性であろう。しかし何と言っても、劇展開上最も重要であるのは、アントニーの演説であるに違いない。ブルータスのものに比べ行数も遥かに多く、又、一見単純に見える反復表現と否定表現を巧みに用いた rhetoric は、その直前にブルータスを「救国の英雄」と讃えたはずのローマ市民の心情を一変させ、彼をしてシーザーと国家を欺く「裏切り者」(謀反人)へと転落させる原動力となるのである。しかし、アントニーの言葉の詳細な分析は別の機会に譲ることとして、ここでは、ブルータスが如何なる理由によって、亡きシーザーに掲ぐ追悼演説をアントニーに許すに至るのか、そして、問題の market-place では如何なる形で弱者アントニーを演壇に招き入れ、それを勝者である己の幕引きとするのか、そこに焦点を当てて探っていくことにしたい。

「高潔の士」ブルータスにとって最高の価値が、まさにその、比類なき高潔さの追及であ

ることをアントニーは熟知していた。そして、「高潔」という名の honour の体現に対するブルータスの希求を最大限に利用する術を心得ていた。しかも、彼が最後にして最大の要求を口にする時、その言葉には卑屈なへつらいは皆無であり、むしろ堂々と当然の要求をするが如き口調で語る so した。 “And [I] am moreover suitor that I may/ Produce his [Caesar’s] body to the market-place/ And in the pulpit, as becomes a friend,/ Speak in the order of his funeral.” (III, 1, 228–231) この言葉の中で唯一、ブルータスの許可を求める含みのある語と言え、 suitor であろうか。しかし、それよりも我々の注目を引くのは、アントニーが、 “as becomes a friend” という表現によって、自分の要望があくまでブルータス等の同志としての要望である点を強調していることである²²⁾。信義を重んじ、与えた (与えられた) 「信頼」には「信頼」をもって報いるものと信じるブルータスにとって、この “friend” という語は致命的威力を持つ。この一語の使用によってアントニーは、ブルータスの “No” という返答を禁じたも同然であった。ブルータスの示した「寛大」に答えて、自ら “friend” と表明した相手を疑うことは彼の信義の道に外れることである。信義に外れぬためには “You shall, Mark Antony” と答えるより他にすべはなかつた。ブルータスは、この答えが己の寛大という「高潔さ」の証しとなるばかりか、 “shall” という助動詞を用いることによって勝者、強者の立場を印象づけたつもりでいたはずである。従って、キャシウスが内心驚愕し不安のあまり、強硬に反対の意を唱えた時も、それは、ブルータスにとって一笑に伏すべき無用の不安でしなかつたのである。

Brutus. [Aside to Cassius] By your pardon —
I will myself into the pulpit first,
And show the reason of our Caesar’s death.
What Antony shall speak, I will protest
He speaks by leave and by permission;
And that we are contented Caesar shall
Have all true rites and lawful ceremonies.
It shall advantage more than do us wrong.

(III, 1, 236–243)

上記引用文で注目すべきは、アントニーに演説を許しながらその内容については全く触れていない点である。ブルータスの関心は唯一、強者、勝者の寛大さとしての honour の実践にあって、取るに足りぬ人物 (a limb of Caesar) の口にする言葉などにはなかつた。そのような言葉など、語る人物同様取るに足りぬ価値しか持ち得なかつたのである。かくして、アントニーが何をどのように語るかについては不問とされ、専ら、如何なる経緯をもって、彼が market-place において語ることを許されるに至ったのかを、(ブルータス自身が) ローマ市民に告げるといふことのみが問題とされたのである。キャシウスの危惧—— “Know you how much the people may be mov’d/ By what [Antony] will utter?” (III, 1, 235–236) ——は奇しくも、アントニーが何をどのように語るかを最大の問題にしているのであるが、既に触れたように、ブルータスは一顧だにせず退けてしまうのである。だが、自信をみせるブルータスの期待に反して、アントニーは “as becomes a friend” という言葉など、口にした時から既に守る意図など持ち合わせてはなかつた。そして、直線的思考より他に判断の術を持たぬブルータスにはアントニーの企みなど想像に及ばず、ローマ市民の前でシーザー暗殺の弁明を終えるや、 market-place を立ち去る前に、アントニーのために登場の花道を設けてやるのである。

Brutus. Good countrymen, let me depart alone,
And for my sake stay here with Antony.
Do grace to Caesar's corpse, and grace his speech
Tending to Caesar's glories, which Mark Antony,
By our permission, is allow'd to make.
I do entreat you, not a man depart
Save I alone, till Antony have spoke.

(III, 2, 54-60)

「(今、話を終えて演壇を降りんとする) この私を除いては誰一人として、(これから演壇に昇らんとする) アントニーが話し終えるまでは立ち去ることなく、最後まで耳を傾けてやって欲しい。」こうして、ブルータスのシーザー暗殺の弁明は“a limb of Caesar”なるアントニーへの最大限の「寛大なる」言葉によってしめくられるのである。それはまた、ブルータス自身にとって己の高潔さを最高点に高めた瞬間でもあった。今さまに、平易な言葉と簡潔な内容の弁明により、ローマ市民の全面的支持を得たと確信するブルータスは、自信と達成感に溢れて演壇を降りようとしていたのである。しかしながら、アントニーに登場の花道を整えてやることによって、自らの美しくも潔白なる退場の花道を設えるというブルータスの願いは無残にも裏切られ、「誰一人として、立ち去るべからず」と言ったあの言葉は、皮肉にも、永遠に彼自身の再登場を禁じる幕引きの言葉となってしまうのである。何故なら、アントニーにとっては本来、第三幕一場で約した恭順や同調の誓いも、己の政治的野心を覆い隠すための *disguise* に過ぎなかったからである。「寛大なる」ブルータスが *market-place* を立ち去った後、如何なる人物による中断(妨害)にも脅かされることなく、自由に語るアントニーの追悼演説はその内容ばかりか、 *rhetoric* を巧みに用いた韻文の力によって、ブルータスの散文——聞き手であるローマ市民のために意図的に選んだと思われる、平易な言葉と簡潔な内容から成る自己弁明の散文を振じ伏せてしまうのである。

しかし、アントニーの主たる目的はシーザー暗殺に報いる復讐そのものにはない。多くの批評家達が、死したるシーザーの靈魂 (*spirit*) の秘める超自然的力を強調し、シーザーがその靈魂の力をもってアントニーを動かしめ、自らの手で、自らの復讐を遂げるのであると解しているようだが、果たしてそうであろうか。既に触れたように、作品中における“*spirit*”という語 (*the spirit of Caesar* という意味での *spirit*) は、「靈魂」としてよりは「野心」としての意味を託された語と解すべきであり、従って、シーザーの靈魂の力を強調するのは疑問なのである。又、アントニーにはアントニー自身の政治的野心があり、シーザーの死に報いる復讐はその目的を遂げるための重要な一歩には違いないが、あくまで単なる一歩に過ぎない。そのことは、ブルータス等と一戦を交えんとする状況下での、レピダスの扱い方や、主導権をめぐるオクティヴィウス・シーザーとの対立などから窺い知ることができるはずである²³⁾。

さてこうして、アントニーの巧みな弁舌によって、救国の英雄ならぬ叛徒と化したブルータスは、言葉による敗北を喫ったばかりか、文字通り、政治的敗北に見舞れることとなり、自ら死して果てる。そして、ローマとローマの人々の自由回復は夢と消え、その命運は、ジュリアス・シーザーの野心を凌ぐとも劣らぬ政治的野心を抱く二人の男達、マーク・アントニーとオクティヴィウス・シーザーの手に委ねられることになるのである。

5. Brutus's over-confidence in the virtue of honour

我々は、ブルータスの求めた honour とはどのような美德であるのかを探ってきたわけであるが、ここまでの、彼の言動に関する分析と議論を通して伝わってくるのは、ブルータスの抱く honour への希求がどれほど強いものであるかということである。honour の実践とは、ブルータスにとって、完全なる「高潔さ」、完全なる「純粹さ」を徹底して求めることである。そしてその徹底ぶりに対しては、誰も疑いを差しはさむ者はいないし、又、そうした姿のブルータス自身の本質的性格としての「高潔さ」についても疑う者はいないであろう。しかし、ブルータスが、己の高潔さや純粹さに対して抱く自負心に関して、果たしてそこに翳りや弱点は無いのかと問うならば、それは、単純に「否」と答えるわけにはいかない問題だと言わねばなるまい。

ブルータスが「高潔」という名の美德、即ち、honour に寄せる信頼とそうした honour の完璧なる体現への希求は、第三者との関わりを持つ時、避け難く弱点を露呈することになる。劇中のブルータスには、己の信じて疑わぬ価値 honour は、必ずや、他者をも動かさしめ——即ち、他者もブルータスの信ずる honour への信頼を共有するに至り——ブルータスの示した高潔に対して、彼等も同様に高潔をもって報いるはずである、と信じて疑わないふしがある。第三幕一場、二場でアントニーに対して示した「寛大」がそうであった。又、ブルータスが、彼自身は、honour に対して抱く信念を自ら欺くような行為に移ることなど決してあり得ぬと、絶大の自信をもっていることは言うまでもない。しかし同時に彼は、自分以外の人物も、ひとたび honour に見出す価値を共有したならば、己と全く同一の行動規範によって、自己を律するものと信じてもいるのである。第二幕一場でキャシウスを始め、シーザー暗殺によるローマ救済という大義によって「心」を一つにしたと信じる同志達に強要した、oath の否定や、大義の神聖化がそうであった。更にそれに加えて、ブルータスは、他者の口にする言葉をその人物の真意をそのまま映すものと信じて疑わぬふしがある。仮に相手が、ブルータスの「高潔さ」に対する比類のない自負心につけ入り、それを利用する意図で語っていても、そのことに気づく様子など劇中一度としてないのである。そうであるからこそ、ブルータスは、キャシウスの誘惑の言葉を誘惑とは知らず、“the general good of Rome” のためと信じてシーザー暗殺に立ち上がり、アントニーの偽誓を偽誓とは知らず、寛大なる処遇により己の「高潔」を高めようとするのである。

ブルータスは、自身を導く信念と自己を律する尺度より他には、判断の拠り所を持たない。だが、堅固に過ぎる信念や尺度は時として致命的弱点となり得るのである。それは、人をして自己過信、更には傲慢に陥れ、自己への無知を招くからである。そして既に触れたように、自己過信という点においては、ブルータスははからずも、己自身の否定したシーザーと同じ弱点を共有していたのであるかもしれない。

さて、ブルータスの自己過信が象徴的に現れているのは、第四幕二場、キャシウスとの口論の場面である。

既に見てきたように、第三幕二場、market-place でのアントニーの言葉はローマ市民を扇動し、ブルータス等暗殺者達を「救国の士」という英雄の座から引きずり降ろし、「反逆者」の汚名を着せ、ローマより放逐しようとしていた。そして第四幕二場、今やブルータスは、反逆者討伐の大義を担うアントニーとオクティヴィアスの連合軍との決戦の前に、小アジア、Sar-

dis の近くに陣を張っていた。そこへ姿を見せたキャシウスは、部下ルシウス・ペラの収賄をめぐってブルータスを非難し始める。ブルータスは、その非難に対して honour を説き, justice を説くことをもって答える。

Brutus. Remember March, the ides of March remember:

Did not great Julius bleed for justice sake?

What villain touch'd his body, that did stab,

And not for justice? What, shall one of us,

That struck the foremost man of all this world

But for supporting robbers, shall we now

Contaminate our fingers with base bribes,

And sell the mighty space of our large honours

For so much trash as may be grasped thus?

I had rather be a dog and bay the moon

Than such a Roman.

(IV, 3, 18-28)

「ローマの支配者シーザーを敢えて葬り去ったのは、「正義」を為さんがためであったはず。その大義を果たした名誉ある——honourable なる——我等の手を「収賄」という汚れた金で辱めようというのか。ああ、そのような蔑むべき Roman にならんよりは、honour などとは無縁の犬となりて、(夜空の月を仰ぎて) 空しく吠えるが遥かに幸せなり。」この言葉の根底に流れているのは、第二幕一場、世直しとしてのシーザー暗殺という大義を実行する直前、大義そのものと、大義を為さんとする者の精神の高潔さや純粹さを汚す行為として、“oath”を拒み、“bouchers”に陥ることを拒んだ、あの時のブルータスを支えていた信念と同一のものである。だがそのブルータスは、自己の「高潔」を信じるが故に与えた、アントニーへの信頼と寛大な処遇を完全に欺かれ、英雄たらんとして不本意にも、反逆者として追われる身となってしまった。ところが、それでも尚、自己の信念と行動の正しさに対する揺るぎない自信を語るのである。この不動の信念と自信は、その比類なき一貫性故に、確かに称讃を受くべき価値として認められねばなるまい。しかしながら、その一方で厳然としてある現実には、信念の人ブルータスが策略家アントニーの前に完全なる政治的敗北を喫している事実にほかならない。だがブルータスは、そのことに対して全く意を用いず、引用文にも明らかであるように、専ら、自らの honour に対する信念の正しさとシーザー暗殺の意義（正義）を説くことに余念がないのである。あたかも、美德 honour の価値を信じ、それに寄りすがれば如何なる苦境にあらうとも、honour の体現者は honour の秘める無限の力によって護られているかのようである。

そして現にブルータスは、キャシウスとの激しい口論を交わすその最中、高潔という名の美德 “honour” によって無敵となった己を誇る言葉を口にするのである。

Cassius. Do not presume too much upon my love;

I may do that I shall be sorry for.

Brutus. You have done that you should be sorry for.

There is not terror, Cassius, in your threats;

For I am arm'd so strong in honesty

That they pass by me as the idle wind,
Which I respect not.

(IV, 3, 63-69)

キャシウスの部下の収賄を発端とする二人の対立は、やがて、両者の Roman soldier としての資質の優劣を争う口論へと発展することになる。その中で、現実的な問題の処理能力（暗に収賄を指す）ではブルータスに優ると自負するキャシウスは、逆にブルータスからそれを否定されたうえ、生来の癩癩を椰揄されるに及んで激しい怒りを顕わにし、ついに刃に手をかけるに至る。しかし、「高潔」という名の honour の鎧に身を包むブルータスは、キャシウスの威嚇など恐れるに足りぬと、自らの無敵を誇ってみせる。「君の癩癩などこけおどし同然。それに脅える私ではない——ブルータスに不死身の武器, honour が備わる限り。」

高潔なローマ人としての誇りだけでなく、武将としての優秀さにおいても誇りを持つブルータスは、それを否定するキャシウスを逆襲しないではおれなかった。そして、それは或る意味で無理からぬことであるかもしれない。しかし、その逆襲の方法は果たして、ブルータスが自ら誇る「高潔」という名の名誉希求に叶うものであったろうか。口惜しさのあまり、相手の怒りを“rash cholera” (IV, 3, 39) と椰揄し、“madman” の放つ“stare” (IV, 3, 40) などに脅えるものと挑発するその態度、それが果たして真の高潔なる——honourable なる——ローマ人の取るべき態度であるかと問うなら、「否」と答えるよりほかないであろう。「この先、君の脾臓が張り裂けて（脾臓は当時、怒りの温床と考えられていた）怒りの毒がその体に蔓延した折には、おおいに笑いの種にして楽しませてもらうよ。」ここまで相手を椰揄し、侮辱し、挑発するブルータスを目にする時、我々の目には、「高潔」に最高の価値を置き、高潔という名の美德の体現者たらんとして、一切の妥協を拒み、比類なき純粹の高潔を求めた、あのブルータスをブルータス自らが欺く姿として映らないではないのである。仮にこの時、彼が妻ポーシャの異常な死を告げられ、（キャシウスは未だ知らない）精神の平衡を失っていたとしても、それは何ら力ある弁明にはなり得ないのである²⁴⁾。

作者シェイクスピアは、二人の対立を決定的なものにすることなく、和解に導いてこの場を終わらせる。二人の友情（特に、ブルータスのキャシウスに対する愛）を悲観して、生きる望みを失ったかのような言葉を漏らすキャシウスに心を動かされたか、ブルータスは怒りから一転、和解の手を差し延べることになり、一件は落着をみるのである。だが、観客や読者の目に映り、そして耳に響いた、ブルータスの過剰なる自信に対する彼等の懐疑の念は、もはや拭い去ることはできない。そして、その懐疑を代弁するのが、詩人（劇中では、Poet と言及されている）の言葉である²⁵⁾。

Poet. For shame, you generals! What do you mean?
Love, and be friends, as two such men should be;
For I have seen more years, I'm sure, than ye.

(IV, 3, 128-130)

表面的には、ブルータスとキャシウスの二人を同等に批判し、真の友情とはどうあるべきかを論ずる言葉となっている。しかし、“shame” という語の向けられている対象は実は、主としてブルータスではないか。「恥を知れ」とは、高潔を自認しつつ、それを自ら裏切る言動を見せたブルータスに向かって放たれた言葉ではなかったであろうか。しかもこの Poet の批判は、

単に、キャシウスとの口論において露呈した、ブルータスの自己矛盾に向けられているに留まらない。“For shame”とは、シーザー暗殺という大義の実践に際して見せた、ブルータスの自己の「高潔」に対する過剰な自信を指して放たれた言葉でもあった。少なくとも、第一幕から第三幕にかけて、高潔さへの自信に裏打ちされたブルータスの言動を追ってきた、観客、読者の耳には、Poet の言葉がそのような響きを帯びて聞こえてこないではないであろう。そして更に、Poet の“For shame”という言葉からは、「傲慢」とも言い得る過剰な自信を「傲慢」とは知らぬまま、己にとっての唯一絶対の価値である「高潔」という名の名譽を求めて突き進んでいった、ブルータスの自己に対する無知をも糾弾する声さえも聞こえてくるのである。

結 び

シーザーの野心が根拠ある野心であったか否かに関する議論は、ここで敢えて繰り返すことはせず、ブルータスの信じた名譽とその名譽の実践に際して露呈した、自己矛盾と限界に言及することで、この小論の結びの言葉としたい。

私心なき名譽、即ち、「高潔」という名的美徳とその希求を唯一絶対の価値と信ずるブルータスは、国家ローマとローマ市民の自由と安寧のために殉ずることを、高潔さの体現と考えた。彼がジュリアス・シーザーの中に見た野心は、私心なき名譽を否定し、ローマの自由を奪う脅威に他ならなかった。従って、シーザー暗殺はブルータスに取って、ローマを救う大義として避けたい選択であり、同時に、自己の希求する真の名譽の実践として価値ある決断でもあったのである。

しかしながら、その真の名譽の実践に際して露呈してくるのは、ブルータスの傲慢とも名付け得る自己過信と、自己無知の姿である。彼は己の「高潔」を信じ、「高潔」の希求に絶対の価値を見るが故に、その同じ価値を他者に強要することとなり、又、对手が、己の求めるものとは異なる意図や狙いを抱いていることに気づかぬまま、むしろ、自己の高潔さに対して自信を深めていくことにもなるのである。しかし、ブルータスを待ち受けているのは、本文でも見てきたように、自ら誇る「高潔さ」を裏切る自己矛盾であり、他者に利用される「高潔さ」の招く敗北であり、破滅でしかない。しかも、ブルータス自身は劇中一度として、自己矛盾も自己無知も認識することなく、一貫して真の名譽を求め「高潔」を体現し得たと信じて疑わなかったはずである。そしてそこに、ブルータスの生の悲劇の二重性があると言わねばならない。

ブルータスがそこに「悪」を見て葬り去ろうとしたシーザーの野心は、シーザー自身の「強大さと権力」に対する過剰な自信、即ち傲慢さが映し出されたものである。だが、「傲慢」という点においてはブルータス自身こそ、その非を免れ得ない。彼が自己の「高潔さ」を比類なき美徳と信じて疑わぬ、その自信を拠り所とした言動は「傲慢」と名付けずして何と評すべきであろうか。ブルータスは、己が憎み退けようとした悪——ローマにとっての悪であり、己の信じてやまぬ真の美徳、「高潔」という名的美徳にとっての悪である「傲慢」を自らの中に宿していたのである。しかも彼は、過剰な自信が自己への無知を生み、果ては破滅を招くことになるなど、決して思い至りはしなかった。いや、のみならず、それと全く同様に、己の糾弾せんとしたシーザーの体現する悪と弱点とが、他ならぬ自らが共有する悪と弱点であったなどとは、全く無想だにできなかったのである。ブルータスにとってシーザーは、第五幕五場、Philippi において死を迎える時まで変わることなく、真の名譽を体現する「高潔の士」としての、自己

自身の対極にある存在でなければならなかったのである。

かくして、シェイクスピアがブルータスの中に描こうとした、高潔という名の美德は、美德そのものの秘める「高潔さ」とは相入れぬ要素を合わせ持つ、苦々しい味わいを帯びたものとして、その命の扉を閉じることになるのである。

注

- 1) Paul Stapfer, *Shakespeare et Lantiquite* (1879) as paraphrased in Augustus Ralli, *A History of Shakespeare Criticism*, II.
John Uhler, *Studies in Shakespeare*, Univ. of Miami Pubs., in English and American Lit., Univ. of Miami pres, 1964.
- 2) Mark Hunter, *Transactions of Royal Soc. Lit.*, X (1931)
Roy Walker, "Unto Caesar: A Reivew of Recent Productions," in *Shakespeare Survey*, II, ed. Allardyce Nicoll (Cambridge, Cambirdge University Press, 1958)
Introduction to The New Arden Shakespeare, *Julius Caesar*, ed. T. S. Dorsch, first published in 1955 by Methuen & Co. Ltd., first published as a University Paperback 1965, reprinted in 1986.
- 3) Introduction to *Julius Caesar*, The New Cambirdge Edition, ed. J. Dover Wilson.
- 4) Rene E. Fortin, "Julius Caesar: An Experiment in Point of View", *Shakespeare Quarterly* 19, 1968.
- 5) William Hazlitt, *Characters of Shakespeare's Plays*, 1805. Quoted from *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. P. P. Howe, IV, p. 195.
H. N. Hudson, *Shakespeare: His Life, Art, and Characters*, 1872, II, p. 224.
J. Dover Wilson, Introduction to N.C.S. *Julius Caesar*, p. XXV.
- 6) Plutarch, *The Life of Julius Caesar*, in the translation by Sir Thomas North, *The Lives of the noble Grecians and Romans*, 1579, 1595, 1603, etc.
- 7) 第三幕二場第247～251行。遺言によれば、シーザーは、金銭ばかりか私有地や家屋を共有地や憩いの場として、ローマ市民に遺贈している。
- 8) T. S. Dorsch, Introduction to *Julius Caesar*, The Arden Edition. p. XXXV.
- 9) the ides of March は3月15日を意味する。ides はそれぞれ、古代ローマ暦では3, 5, 7, 10月の15日を、他の月では13日を指す。
- 10) 実は、アルテミドラスはギリシャ語教師という職業にあるため、ブルータス等と親交を持っており、彼等のシーザー暗殺の陰謀を知ることとなる。
- 11) 人称代名詞 "royal we" に関しては、本文 p. 5 の説明を参照。
- 12) 注4を参照。
- 13) たとえば、以下に挙げる三人の批評家達は共通して、「根拠の無い推測」がブルータスをシーザー暗殺へと向かわせたという見解を示している。
Ernest Shanzer, "The Problem of Julius Caesar", *Shakespeare Quarterly* 6, 1955. 彼は "impending conditions" という表現を用いて、ブルータスの危惧（シーザーの野心に関する危惧）が現実の根拠に基づくものではなく、単なる推測の域を出ないものに過ぎないことを指摘している。
Anne Paolucci, "The Tragic Hero in *Julius Caesar*", *Shakespeare Quarterly* 11, 1960, p. 333.
William R. Rowden, "The Mind of Brutus", *Shakespeare Quarterly* 17, 1966, p. 61.
- 14) Plutarch は、シーザーの野心について次のように伝えている。
"But the chiefest cause that made him mortally hated was the covetous desire he had to be called king: which first gave the people just cause, and next his secret enemies honest colour, to bear him ill-will."
- 15) T. S. Dorsch, Introduction to *Julius Caesar*, The New Arden Edition, p. XV, XXXV.
- 16) Rene E. Fortin, p. 344. 彼は、シーザー暗殺を "Brutus' crime" とする、T. S. Dorsch の見方に同調している。
- 17) "impending conditions" という表現は Ernest Shanzer の用いたものである。注13を参照。
Anne Paolucci 自身は、"With a kind of divine foresight, Brutus sees the Caesar who *might have been*, the Caesar who never really existed." (イタリアック体は Paolucci) という表現によって、シーザーの野心はブルータスの自己神聖化が生み出した空想であるとしている。注13を参照。
- 18) 第一幕二場、キャシウスは、"mirror" のイメージを用いた比喩表現によって、ブルータスが自己の偉大さに対して盲目であると説き、嘆いてみせる。当然ながら、ブルータスは秘かに自負心を刺激

されるのである。

- 19) 紀元前6世紀末、Lucius Julius Brutusは、当時独裁政治によってローマ市民を苦しめていた暴君、Tarquinをローマより放逐した。Tarquinは、ローマのタルクイニウス王家7代目の王で、その暴政故に Tarquinius Superbus (Tarquin the Proud) と呼ばれた。
- 20) “honesty” ここでは integrity, uprightness といった意味。
- 21) Anne Paolucci, p. 330.
- 22) “friend” はアントニーが亡きシーザーに対する親愛の意を託して用いた語と解する事も可能であるが、ここでは、その考えを取らない。
- 23) アントニーは、レビダスを “ass” とか “barren-spirited fellow” と言った表現で言及し、侮辱するだけでなく、その労力を必要なだけ利用し、不要となる時がくれば即座に切り捨てるべき対象と考えている。(第四幕一場、冒頭)
- 24) Catoの娘として恥ずかしくないだけの気丈さを(原文では constancy という語で表わされている)自ら誇ったポーシャは、第二幕四場で女性としての弱さを露呈し、狂気と化して炎を口にし、死に至る。
- 25) Poetは、作者シェイクスピアの皮肉な声の代弁者と見ることもできる。

*** テキストは、The New Arden Shakespeare, *Julius Caesar*, ed. T. S. Dorsch, reprinted, 1986, Methuen. 及び、The Taishukan Shakespeare, *Julius Caesar*, 1989. を用いた。本文中の引用文は、これらのテキストからのものである。

その他の参考文献

1. R. A. Foakes, “An Approach to ‘Julius Caesar’”, *Shakespeare Quarterly* 5, 1954.
2. Gordon Ross Smith, “Brutus, Virtue, and Will”, *Shakespeare Quarterly* 10, 1959.
3. Douglas L. Peterson, “Wisdom Consumed in Confidence: An Examination of Shakespeare’s *Julius Caesar*”, *Shakespeare Quarterly* 16, 1965.
4. Leo Kirschbaum, “Shakespeare’s Stage Blood and Its Critical Significance”, *PMLA* 64.
5. Brents Stiring, “Or Else This were a Savage Spectacle”, *PMLA* 66.
6. Mildred E. Hartsock, “The Complexity of *Julius Caesar*”, *PMLA* 81.

—平成8年10月9日 受理—